

【作品概要】

演劇での風景は、人物の向こう側にあり、添え物として扱われることが多いように感じる。

情緒、情念、執念、想念は、風景が代弁してくれることも多い。

風景に影響を受け、あり得ないかもしれないが、人間の感情が風景へ影響を与えらると思える。

映画だと、演劇よりも風景描写を表現しやすい。

演劇だと、カメラワークができない為、舞台上に風景を直接見せることは不可能である。

舞台上で映像を使い、風景と人間の関わり方を見せるのではなく、あくまでも役者の身体表現、身体の状態を提示し、観客の心の中に風景を立ち上がらせたい。

最終的には、舞台を見ているようで見ていないように、自分の原風景、記憶の風景を観客に想起させることを目標とする作品である。

【登場人物】

・清家 美紗（せいけみさ）

故郷から離れ、遠く離れた都市に住む。

西日本全域大雨災害を、実際に経験していない。

・田口 翔子（たぐちしょうこ）

清家と同級生。実家はお寺。老人ホームで高齢者のお世話をしている。

・宮本 彩香（みやもとさやか）

国勝と夫婦。清家と同級生。長い妊活を経て、ようやく子供を授かる。

・宮本 国勝（みやもとくにかつ）

彩香と夫婦。清家と同級生。

・井藤 重正（いとうしげまさ）

浩之の父親。妻を亡くし、浩之と二人暮らし。

・井藤 浩之（いとうひろゆき）

重正の息子。清家と同級生。筏釣りを営む家業。

一、

明転後、役者は登場しているが、物語は展開されない。  
舞台上で音が支配する時間が終わると、役者の演技が開始される。  
三場面全ての導入を音のインスタレーションで始める。

南海トラフ地震の際に津波被害が予想される、愛媛県海端にある寂れた町。  
急峻な山々の間に平地がわずかにあり、穏やかで入り組んだ湾が常にそこにあ  
る。裏は山、前は海、場所も多く、海、山の恵みで細々と人が生きる。

山の中腹にある寺。斜面を覆うように墓が立っている。  
本堂に誘うように、地面中央にはコンクリートの細い道。  
本堂裏山は、緩やかなミカン畑。

空を覆い尽くすように雲が垂れ込め、禍々しい朝焼け。  
夏の暑い朝。  
本堂手前にある東屋。

境内には、びしょ濡れになった美紗、翔子、彩香、国勝。  
寺を下る坂道を、全身ぽたぽたと滴が垂れる四人が茫然と見ている。  
息が乱れているが、誰も何も話さない。微動だにしない。  
ぽたぽたと、滴が垂れ続ける。  
蝉が激しく鳴く声。

茫然とした気持ちを流すように、彩香がお腹に手をやり、さする。  
息が乱れながらも、国勝が彩香に話しかける。

国勝 お腹、打ったりしてないか？ どこも痛くないか？

彩香 大丈夫。…これぐらい、なんてことないよ。

国勝 お腹…。

彩香 打ってない、少し驚いただけ。

翔子 国勝、お父さんの予定。

国勝 そう。和尚さんとお話することになった。あ、そろそろ時間…。

翔子 その前に、少し休んだら。びしょびしょやけん。

彩香 翔子ちゃんは。

翔子 私と美紗ちゃんは後でいいけん。

彩香 でも、ふたりとも、びしょびしょやのに。

「滲む山」

翔子 彩香は妊婦さんなんやけん、お先にどうぞやで。  
国勝 彩香が心配やけん、お願いできる？  
翔子 いいよいいよ、ふたりとも、こちらにどうぞ。

三人は息が乱れているので、あまり大きな声が出ない。  
翔子が彩香と国勝を連れ、本堂横にある自宅に連れて行くこととする。  
美紗は何も喋らず、寺を下る坂道をじっと見つめたまま。

翔子 美紗ちゃん、少し待つとれる？

翔子に声を掛けられ、ようやく我に返った美紗が、

美紗 うん。

ト、小さな声で頷く。

国勝が彩香を労わりながら、翔子に連れられ歩いて行く。  
ぽたぽたと滴を垂らしながら、三人を見送る美紗。

境内から見える山々は、朝焼けでうっすらと赤く色がついているようだ。  
寺から見える小さな湾も赤い。

美紗 山が、赤く滲んどうる。(山を指して) 赤、(空を指して) 赤、(海を指して) 赤。  
…私の体まで赤く滲んどうる。

自分の体がうっすらと赤い気がして、ぽたぽたと垂れる滴を眺める美紗。  
地面の上に落ちている小さな黒いもの。  
その何か分からないものが目の端に入り、吸い込まれるように近づいた美紗は、  
地面に落ちている、黒くて小さな何かを屈んで見ている。  
地面になぜか、ゴンズイが一匹。

美紗 きつとさつきまで、海の中にいた。変わらない朝が来たのだろうに、今は私  
の前で、朝陽を浴びて、土の上に落ちとる。

美紗がゴンズイを見続けている。

美紗 思いがけずに死んでしまった。

急にえづく美紗。胸をさする。

美紗 ううっ。…こんなことになるなんて思いもよらんかったやろね。

本堂から東屋に歩いて来る翔子が、美紗に声をかける。

翔子 浩之、戻って来てない？

美紗 ああ…忘れとった。

翔子 そんな滴ぼたぼたさせて、忘れとったん？

美紗 ああ…。

美紗と翔子が辺りを見回すが、誰もいない。

翔子 ふたりとも、びしょびしょやなあ。…なに見とったん？

美紗 …死んでしまった。

翔子 ゴンズイ？

美紗 ひとり取り残されとる。浩之に無理矢理連れて来られたんやで。あいつ…。

ゴンズイは翔子と美紗に囲まれて、見られている。

翔子 つやつやしとるな。

美紗 もうロパクパクしとらんけん、干からびていくんやな。

えづく美紗。胸をさする。

翔子 どしたんどしたん。え、美紗も…妊娠しとる？

美紗 どこにもだあれもいませーん。

翔子 あ、早合点だったあ。

美紗 息がしにくくて。

翔子 息？今は息できとる？

美紗 やめてやめて、ゴンズイみたいに、いきなり息できなくなったら怖いけん。  
やめて。

翔子 ごめーん。

翔子が美紗の背中をさすり、辺りを軽く見回す。

美紗 網ですくわれた時、逃げようとして抵抗したやろか。

翔子 抵抗、したんやない？魚だって、死ぬことは恐怖やろうと思うよー。

美紗 網ですくわれた時点で、死が近づいて来とることを理解したと思う？  
翔子 いつもと違ったことが起きれば、恐怖はしたんやないかな。  
美紗 死が近づいて来とることは？  
翔子 どうやろう。ゴンズイに聞いてみる？  
美紗 死んどるけん、聞かれん。  
翔子 魂に聞いてみたら？ お寺にいれば、まだ魂がうろろう歩いとるかもしれん。  
美紗 魚なのに、歩くん？  
翔子 魚やから、ゆらゆら動いとるかもしれんねえ。  
美紗 ……いつもと違うことが起これば、誰だつて恐怖する。…私らもやん。  
翔子 そうだよね。

美紗がゴンズイを触ろうとする。

翔子 ……触ったらいけん！ ゴンズイは、死んでも毒を持つとるんで！  
美紗 動かんけん、毒針には当たらんようにする。  
翔子 油断したらいけんよ。  
美紗 (ゴンズイを触りながら) つやつや。…山で死ぬとはなあ。  
翔子 あとで、丁重に吊つてあげようよ。  
美紗 土の上にひとり取り残されて、死を受け入れたんかな。なあ、ゴンズイ。  
翔子 魚やのに、ひとり？  
美紗 私と、ゴンズイ。お互い、ひとり。…あ、ゴンズイも赤く滲んどる。  
翔子 どれー。  
美紗 山も空も海も赤く滲んどる、翔子も私も、ゴンズイも赤いな。

美紗は息が乱れている。

翔子 ちょっと、私らも座ろうか…。

翔子が美紗の腕を優しく取り、ゆっくりと東屋に連れて行き、座らせる。

美紗 東屋、濡れてしまう。  
翔子 いいよいいよ、これぐらい。  
美紗 赤潮やで。  
翔子 ああ…浩之、言うとなつたな。これぐらい誰も怒らんよ。

風を感じるふたり。

「滲む山」

翔子 …風がでてきた。  
美紗 うん。  
翔子 お父さんらと話したんやけど、通報するほどではないよね？  
美紗 ほど、ではないけど。  
翔子 うん。  
美紗 私らを脅かしたことは、「ほど」、で片付けられんと思う。  
翔子 …。

美紗は風を感じながら、寒いのか体をさすっている。

美紗 気温下がってきとらん？ なんでか寒く感じるんやけど。  
翔子 私ら、びしょびしょやけんやない？  
美紗 ああ…、そっか。翔子は寒くない？  
翔子 暑さで生暖かく感じる。  
美紗 そっか…。  
翔子 服乾かす？ 彩香たちみたいにな。  
美紗 あ、彩香と国勝どう？  
翔子 お母さんが今洗濯して、アイロンで乾かしてくれとる。国勝にはお兄ちゃん  
美紗 の服着せて、彩香には私の服着せて。シャワーも浴びてもろたけんね。  
美紗 落ち着いた？  
翔子 お父さんが話しとる。…寒かったら、美紗ちゃんもシャワー浴びて来る？  
美紗 風が乾かしてくれる。  
翔子 そんなこと言うても、寒いんやろー。  
美紗 いや、多分引っ張られたんかもしれん。  
翔子 引っ張られた？  
美紗 この境内から見た風景の記憶は、爽やかな朝、ももことした木が生える山  
があつて。山が見守るように私たちを取り囲んでる。でもどうよ、今日は。台座  
越しに見える山々が、朝焼けで赤黒く染まつとるように見える。引っ張られるや  
ん、いつもと違う朝なんじゃないかって。  
翔子 そう？ 私の記憶だと、こんな風景もある。  
美紗 沢山はないやろ？  
翔子 頻繁じゃないけど、まあまああるよ。  
美紗 ゴンズイが地面に落ちとる風景は、あつた？  
翔子 …。  
美紗 …いつもと違う朝やったやん、今日は、間違いない。  
翔子 …。  
美紗 震えとるやん。寒いん？

「滲む山」

翔子 寒いんやない、なんかさつきから力がぐーっと入ったまま。  
美紗 震えとる。  
翔子 美紗ちゃんは違うん？  
美紗 私も震えとるみたい。：私に気を遣わんと、翔子も乾かしてきたら？  
翔子 風が乾かしてくれる。  
美紗 同じこと言うとるやん。  
翔子 ：海の潮やけん、べたつくやろけどねえ。  
美紗 ああ：。

ト、美紗と翔子は服の匂いをかぐ。  
二人は力が入ったままなのか、震えながら会話を続ける。

美紗 臭い。  
翔子 これは：。  
美紗 生臭い：。海が死んだる匂いや。  
翔子 女子の匂いじゃないね。  
翔子 あれだけの赤潮なんやけん。きっと、頭も全部臭いよ。  
美紗 自分から出る匂いがきつすぎて、鼻が麻痺してきた。  
翔子 すぐになれるよ。  
美紗 ：本当や、力がぐーっと入って、勝手に震えとる。  
翔子 やろう？

美紗と翔子は小さな湾に向かって、寺から見下ろしている。

美紗 赤潮、久しぶりに見る。  
翔子 数年、赤潮発生せんかったんやけどな。漁業関係者はみんな泣いとらい。  
美紗 ：浩之の家もやな。  
翔子 そうやで。筏釣り。  
美紗 やったことある？  
翔子 ないー。  
美紗 （空を見上げて）赤黒く染まっとる空、海は赤潮。空の色、海の色どっちかが映って見えとるんやろか。こんな時に限って、台座に観音様がおられん。  
翔子 今、不在。  
美紗 おられんことで、不安になるんやけど。  
翔子 おられんけど、大丈夫やで。不在だけ見てくれとるよ。  
美紗 観音様、どこいきなさったん。  
翔子 綺麗になってもらう為に、修理に行ってもろた。

美紗 不在の台座にお賽銭置いてみた。  
翔子 ありがとう。

美紗 こうやって、不在の台座に向かって拝んどいた。何も起きませんようにって。  
起こつたけど。お賽銭置いたのに、起こつたんやけど。お賽銭、置いたのに！

翔子 ごめんね、不在で。

美紗 お賽銭、置いたのに。

翔子 お賽銭置いて拜んでくれたけん、大ごとにならんかったんやないかなあ。

美紗 大ごとにはなつとる。…泥だらけ。

翔子 潮だらけ。

美紗が肩を上げ下げしながら、観音様が不在の台座に向かう。

美紗 体に力が入り過ぎて、苦しい…。

翔子 美紗ちゃん。えっと、

翔子が「息はできているか？」をジェスチャーで尋ねている。

美紗 …あんまり考えんようにしとる。

翔子 ごめん。浩之、どこかに見えたりする？

美紗 見えん。おっちゃんも見えん。…おっちゃん、浩之を追いかけて行つたけど、  
どうするつもりやろう。

翔子 普通に話し合うんやないかな。

美紗 みんなを脅かしたのに、話し合いなんてできる状態なん？ 浩之が普通に話  
し合ひできるんなら、脅かしたりしないやろう？

翔子 美紗ちゃんは、どっちを怒つとるん。みんなに赤潮ぶつかけたこと、ゴنز  
イで自虐しようとしたこと。どっちを怒つとるん？

体に力が入ったまま、段々と早口になってくるふたり。

美紗 どっちも。どちらかと言うと、みんなを脅かしたこと。

翔子 事情だつて言い分だつて、それぞれやで。赤い空だつて、赤潮だつて、赤色  
に滲む山だつて、それこそゴنزイだつて。

美紗 そうやけど。意味が分からん。全く理解できん。

翔子 理解できなくても、受け止めることはできるんやない？

美紗 受け止められるかなあ。

翔子 必ず共感せんでもいいんやない？

美紗 それでいい？ 脅かす行為は、やっぱりどうかしとる。

「滲む山」

翔子 脅かした本人が、脅かした行為を認識できてなかったら、どうする？  
美紗 それやったら、もうどうしようもないな。

翔子 事実を受け止めるしかないやん。見てよ。この山の斜面にあるお墓は、人が  
亡くなった事実。人は、信じられないことで、死ぬんやで。

美紗 だから？

翔子 …。

美紗 …。

翔子 おっちゃんは、浩之の自殺を心配しとるんやないやろか。

美紗 連れて来られたゴンズイも、死んだるけどな！

美紗と翔子は風にあたりながら、無言になる。

また、蟬が激しく鳴き始める。

翔子 山には、死が集まって来る。

美紗 …。

翔子 偉そうに言ったけど、どうしたらいいか私も分かんない。

美紗 …彩香と国勝は許せるやろか。

翔子 …。

美紗 翔子は。

翔子 え。

美紗 翔子は許せるん。

翔子 そんなに被害受け取らんよー。

美紗 まあまあ被害受けたよ。

翔子 少し脅されたぐらいやし、走り回って泥だらけになって、赤潮かぶったぐら  
いやもん。

美紗 また、「ほど」って言うの。通報するほどでもないって。

翔子 なんにも怒ることはなあいよ。

美紗 へ。

翔子 大鴉が言うんよ、絶望した青年に。

美紗 どここの青年？

翔子 詩の中。

美紗 死？

翔子 そう聞こえただけで、本当にそう言うてるんかは分からん。けど、きつと言  
うたんやろうな。青年にはそう聞こえたんやけん。

美紗 え、死んだるんやろう？ 青年は。

翔子 死んでない、死んでない。

美紗 死って。

翔子 ああ、詩。ポーの物語詩だよ。

鳥が応えるように裏山で鳴いている。

翔子 (翔子が鳥に向かい) おーい。ここに取り残されたゴンズイ、食べたらいけんよ。

裏山で鳥がけたたましく鳴いている。

翔子 ひとり、取り残されとるんやけん。そうやんね？

美紗 そう。

翔子 おーい、聞こえとる？ 絶対、食べたらいけんで。あんたが死ぬんやけん。ゴンズイはもう先に死んどるけど。あんたも後を追いかけることになつたらいけんてや。山で死ぬことは、もう避けて欲しいんよ、もう死んで欲しくないんやけん。

美紗 翔子は、浩之が自殺するかもって考えとるん？

翔子 ううん…ただ山で死んで欲しくないだけ。

美紗 …翔子は浩之がしたこと、怒つとらんの？

翔子 …なんにも怒ることはなあいよ。

寺に続く坂道を、浩之の父・重正が登って来る。

立ち上がる美紗と翔子。

重正 戻ってきとらん？ 浩之。

翔子 あれから見かけてないよー。

美紗 おっちゃん、追いかけたんやなかったん？

重正 追いつけなかった。あいつはバケツ持ったまま、どこに行つてもたんや。

美紗 あれ持つて、ウロウロしとるん。

美紗と翔子は、まだ見た目にもぐつしよりと濡れたままにいる。

重正が地面に膝をつき、帽子を取って握る。

重正 …ふたりには悪いことしてしもた。

美紗 (重正を立たそうと) おっちゃん。

重正は膝をついて座ったまま、頑なに立ち上がらない。

重正 本当に申し訳ない。

翔子 少し脅されたぐらいやし、走り回って泥だらけになって、赤潮かぶったぐら  
いやもん。なんにも怒ることはなあいよ。なあんでもなあいよ。

重正 だって、びしょびしょやないか。おっちゃんに娘はおらんけど、自分の娘が  
— そんなことされたらと思うと、辛いわい。

美紗 おっちゃんに責任ないよ。

重正 そんなこと言うても。：言葉にならん。：皆にはもう、悪いことせんと思  
うんやで。あいつは小心者やけん、大それたことはできん。

翔子 私らはいいけど。

重正 いいんか。

美紗 私は怒つとるけどな。

翔子 通報するほどではないと思う。

美紗 また、「ほど」って言ったやん。

翔子 ただ、彩香と国勝にとつては十分、大それたことやから。

重正 そりや、そうよ。妊婦さんなんやけんな。彩香ちゃんと国勝は。

翔子 お父さんがふたりと話しとるけん、大丈夫やで。

重正 和尚さんが話されとるんやな。おっちゃん、ふたりにも謝らんといけん。お  
っちゃんにも責任あるんやけん。

美紗 浩之がなんでこんなことしたんか、知つとるん？

重正 …正直、分からん。でも、父親ひとりが育てたことが原因やないやろか。

悲しそうな重正。

美紗と翔子が重正をゆっくり立たせる。

美紗 おっちゃん、私らにそんなことせんていいけん。涙出てしまうやん。

翔子 そうやで、もしせんといけんのやったら浩之にしてもらうけんな。

鳥が応えるように裏山で鳴いている。

翔子 あんたに言うたんやないよー。

美紗 あんたはゴنزイ食べて死なんように気を付けたらいいわーい。

重正が帽子をかぶる。

重正 あいつは気が弱いやつなんよ。

美紗 浩之が青ざめて、ポリタンクとライター持って、そこに立っとなった。いつも

と違う朝が来たと思ったよ。それは、ガソリンだと思ふやない。

翔子 でも、ガソリンやなかったわけやから。

美紗 ガソリンやなかったわけやから、通報するほどじゃないってこと？

翔子 事情だつて言い分だつて、それぞれ。

美紗 全く理解できん。

重正 …おっちゃんが、やつぱり謝らんといけん。

美紗 なんて…おっちゃん、ポリタンクに赤潮入れるとこ見たん？

重正 見た。

美紗 不審な感じはなかった？

重正 家の前の海で、浩之が柄杓でポリタンクに赤潮入れとつた。何しよるんやろ

か思つて、声かけたんよ。そしたら、「ちよつとした遊びや」言うて、歩いて行つてしもた。

美紗 遊び？ ちよつとした？

重正 すぐに異変を察知できんかったのが、おっちゃんの責任や。

重正が帽子を脱ぎ、手で顔を覆うが、その手が震えている。

美紗も翔子も無言になり、激しく鳴く蝉の声が響いている。

美紗の気持ちを刺激しない様に、翔子がゆつたりとした声で話す。

翔子 理解できなくても、受け止めることはできる…かな。

美紗 理解はできん。

翔子 …。

美紗 脅かした行為も許せん。けど、脅かした行為を認識しとるのか、本人に聞いてみたいと思う。彩香と国勝が許せるなら…。

翔子 美紗ちゃん、震えとる。

美紗 え。

重正 赤潮かぶつたけん、寒いんやないか。

翔子 美紗ちゃんも私も、力がぐーつと入つたままなんよ。

美紗 震えとる。…空も海も真っ赤で、引つ張られてしもうた。いつもと違う朝が来たと思つて。台座に観音様がおらんことで、不安も感じてしもうたんやな…。

翔子 おっちゃん、私ら、死ぬかと思つたんよ。人は信じられないことで、死ぬんやけん。

重正 …おっちゃんも震えてきたい。

重正が拳を固く握る。

重正 あいつは弱いやつやけん、自殺するかもしれん。

美紗 ここにひとり取り残されたゴンズイは、自殺じゃないけどな。

重正 なに、ゴンズイ。  
美紗 浩之に網ですくわれて、連れて来られて、そこにひっくり返つとる。  
重正 踏んだらいいけん。  
美紗 分かつとる、分かつとる。  
重正 なんて、ゴンズイが…。

翔子が美紗をちらりと見る。

翔子 おっちゃん、見とらんのかな？ 坂登って来た時に、浩之の行為は見とらんのやる？

重正 …おっちゃんが来た時に、みんな、びしょ濡れで、浩之がポリタンク持ったつたやる？ 柄杓で入れとつた赤潮やと、すぐに思った。

美紗 バケツは？ バケツは見んかった？

重正 あいつが、坂道を降りて行くのを走って追いかけたけど、中身は見れんかった。

翔子 そっか。

重正 まさか、みんなにゴンズイを引っかけようとしたんやないやるな。

美紗 さあ、何しようとしたんやる。本人に聞いてみると分からんよ。

翔子 そうやな。知らんけど連れて来たー、浩之が。

美紗 多分やけど、引っかけようとかはなかったと思うで。

翔子 そうそう。

重正 …そうならいいんやけど。おっちゃん、心配や。

翔子 浩之は自殺したりせんよ。

重正 そうやるか。

美紗 うん。それに、おっちゃん間違えとる。弱いけん自殺するんやない、弱くても強くても引つ張られた時に自殺しやすい。誰でも引つ張られる可能性はあるけん。

重正 そうやな、おっちゃんもや。

翔子 私も。美紗ちゃんも。誰でもやで。

重正が悲しく微笑む。

重正 あ、おっちゃん不謹慎や。笑ってしもうた。

鳥が応えるように裏山で鳴いている。

翔子 あ、あの鳥がおっちゃんを笑わせたんやな。後で怒っとくね。

美紗 私も怒っとく。  
重正 ふたりとも、すまんかったな。

重正は再び、地面に膝をつこうとする。

美紗 (重正を立たせようとしながら) おっちゃん、少し家で涼んできたら。  
重正 ふたりは。  
美紗 私ら、浩之が戻って来るか、少し待っとくけん。  
翔子 おっちゃんが謝っとったこと、彩香と国勝に言うとかね。心配いらんよ。  
重正 そんな。いいんやろか。悪いわい。  
美紗 いいのいいの、全然問題ないてや。  
翔子 本当に問題ないよ。  
重正 ありがとう…。

重正はじつと立っている。

重正 …。  
美紗 浩之が来たら、鳥と一緒に怒っとくけん。  
翔子 今は、おっちゃんを笑わせた鳥を私らで、怒っとくけんな。

重正が少し微笑み、坂道を降りて行く。  
蝉が激しく鳴いている境内。  
美紗と翔子は少しの間、何も話さず、重正が降りた坂道を見ている。

美紗 風って、なんで頬をさわさわするんやろ。  
翔子 なんてやろうなあ。  
美紗 風が頬をさわさわして、ハッとすることあるやん。  
翔子 …ハッて？  
美紗 そう。  
翔子 なんてやろなあ。  
翔子 …。  
美紗 …。

美紗と翔子は、相変わらず硬い顔をしている。  
先程、坂道を降りた重正が小走りで坂を上がって来る。  
翔子と美紗は身を硬くして、

「滲む山」

美紗 おっちゃん、どうかしたん！  
翔子 急いで、なんかあったん？

重正が帽子を押さえて、

重正 (お墓の方をチラリと見て) 不謹慎やろか…。

翔子 日課のお墓参り？

美紗 日課なん？ それで、浩之がポリタンク持った時も、坂登って来たん？

重正 毎朝、愛しとるでって言うてやらんと、嫁さんが寂しがるんよ。

美紗 おばちゃんが眠るお墓に、愛の言葉を囁いとるん？

重正 そうなんやけど…。

翔子 日課やもんね。

重正 風に負けんように大きい声で言うことを、自分で決めとるんや。

美紗 そうか。囁いとるけど、実際は大声なんや。

重正 (声を張り上げて) 今日も愛しとるでーって言うんやけん。

重正が慌てて帽子を脱ぐ。

重正 赤潮かぶった二人の前で言うことやなかったわい…。

鳥が応えるように裏山で鳴いている。

重正 鳥は何を言いよるんやろう。

翔子 今朝は遅いなあつて、おばちゃんが言うとるよーって。言うとる。

重正 翔子ちゃん、鳥が何言うとるか分かるんか。

美紗 おっちゃん、私も雰囲気で言うこと分かるで。

重正 …美紗ちゃん。

美紗 はい。

重正 そう言えば、栄吉さんが亡くなった時に、おうた以来やなあ。

美紗 そうなんよ。今朝はバタバタしたけん、言えれんかったけど。

重正 …ふたりとも、すまんかったな。

美紗と翔子は軽く首を振り、これ以上は何も言えないでいる。

重正 頑張りよるんやろ、栄吉さんもきつと喜んどるで。

翔子 今朝は遅いなあつて、おばちゃんが言うとるなあ。

重正 また鳥が言うとるんか。

翔子 いや、私が言うとする。

重正が笑う。

重正 ああ、不謹慎や。

重正が裏山を見るが、鳥は鳴いていない。

翔子 おっちゃんを笑わせた鳥、また後で怒つとくけん。

美紗 私も怒つとく。

重正 …浩之、ワシに似ずに真面目やけん。真面目過ぎるのが心配なんよ。…これ、持ってきたの忘れとつた。

重正がポケットからミカンを2つ取り出し、台座に置く。

重正 お賽銭増えとるな。

美紗 私が置いたん。

重正 そうか。さあて、と。

重正がポケットから白い布を出して、ミカンにかぶせる。

美紗 (驚き) 白い布。

美紗が台座まで走り、白い布をじつと見ている。

重正 どがいしたん。

翔子 おじいちゃんがな。亡くなった時。火葬場で棺桶の中見たら、顔が布で隠されとつて、見ることも触ることもできんかったんよ。

美紗 まさか、こんな日に思い出すなんて。

美紗が、ミカンにかけられた布を見つめ、ゆっくりと、めくろうとする。  
2つのミカンをじつと見る、美紗。

美紗 ミカン。おじいちゃんじゃない。

翔子 うん。

美紗 ミカン。

翔子 うん。

「滲む山」

美紗 おじいちゃんだったら、嬉しかったのに。

2つのミカンをじつと見る美紗を、翔子と重正が見守っている。

重正 栄吉さんのお墓に会いに行けたか？

美紗 うん、さつき。

重正 この、お寺の山自体が栄吉さんみたいなもんや。美紗ちゃんを見守ってくれとるで。

美紗 山。

翔子 今朝は遅いなあ、何しよるんやろなあ…。

応えるように裏山で鳴く鳥を、どこで鳴いているかと三人は探すように見ている。

翔子 今のは美紗ちゃんが言うとるよつて、鳥は言うたんよ。

重正 …分かった。もし、浩之が戻って来たら、話聞いてやつてもらえんやろか。

男同士はいけない、喋らんもんよ。

美紗と翔子が頷くと、重正は本堂の奥にある、お墓の方へと歩いて行く。

重正 今朝は遅いなあつて、嫁さんに怒られるけん、行つてくらい。

重正の後姿を、見送る美紗と翔子。

美紗 このお寺の山自体が、おじいちゃんなんやろか。

翔子 …そうかもしれん。あの山も、あつちの山もおじいちゃんかもしれん。

美紗 …あつちの山は違うかな。

翔子 あ、違う？

美紗 でも、こつちの山はおじいちゃんかもしれん。

翔子 そうかあ、こうやって見守ってくれとるんやね。美紗ちゃんのおじいちゃん。

美紗 私が今いる、お寺の山も、ここから見える山々も、頼りがいある、おじいち

やんみたいやな。おじいちゃんじゃない山もあるけど。

翔子 うん。

美紗はミカンに背を向けて、小さな湾に向かって寺から見下ろしている。

美紗の背中に向けて、翔子が話しかける。

「滲む山」

翔子 昨日。防災無線で役場から、「大雨洪水警報が発令されとります、短時間での集中豪雨も考えられます。早く避難して下さい言うて、放送があったんよ。

美紗 え、そうやったん。

翔子 美紗ちゃんの高速バスが着く前。予想は外れて殆ど降らんかったけど、いつもと違う朝が、また来るかもしれんって思った。

美紗 また。

翔子 また。

美紗 今朝の、いつもと違う朝を見越してたとか？

翔子 お寺の娘でも、そんなことはできんよー。

美紗 そうやんな。

翔子 去年の大雨災害の時みたい。いつもと違う朝かと。

翔子がゴンズイに視線を落とし、目の前の東屋に座る。

美紗は台座の向こう側に回り込み、翔子を見る。

美紗 私。Twitterで発信される情報を、食い入るように見とった。

翔子 遠く離れた場所から、見てくれてたんや。

美紗 山は厳しい。見守ってくれとる、おじいちゃんの山には悪いけど。

翔子 海もね、厳しいよね。

美紗 うん、厳しい。

翔子 私は…私のおばあちゃん。その小さな湾だと思つとる。ここから見える場所にあつて、傍で私を見守ってくれとるんやないかと思つとるんよ。

美紗が寺から見える小さな湾に、大きく手を振る。

美紗 翔子のおばあちゃん！

翔子 はーい！

美紗 翔子言うて、どうする。

翔子 いや、おばあちゃんが、きつとそう言うと思ふんよ。

美紗 狭い空。山が重なる急峻な場所。怖さを感じる朝焼け。見下ろした先にある小さな湾。

海の匂いがする。赤潮のような生臭い匂い。山は厳しい。海も厳しい。

翔子は美紗を見ている。

美紗 山の中腹辺りで引っかかるように、お寺がある。おじいちゃんだと思う、この山。

「滲む山」

翔子 去年の大雨災害は、山の裾が少し崩れてしもた。  
美紗 山は、やっぱり厳しい。  
翔子 でも、昔から山は一緒に暮らして来たんやから。  
美紗 大雨が降り、至る所で崩れた。一緒に暮らして来た山が崩れた。何軒もの家が山に飲み込まれた。  
翔子 でも、安穩としてたんじゃない。逃げようとしたけど、その前に山が崩れたんよ。  
美紗 海もいつか、家や人や町を飲み込む。  
翔子 でも、海とは、何とか喧嘩せずにやつとる。  
美紗 でもでもつて。何人も亡くなったやん。山と喧嘩して。海ともいつか、喧嘩する。  
翔子 …。  
美紗 山は厳しい。海も厳しい。  
翔子 遠く離れた場所で、この町を見とる気持ちは、どんな気持ち？  
美紗 え。  
翔子 Twitterを食い入るように見てたんやろう、大雨災害の時に。どんな気持ち？  
美紗 心配でたまらんかった。  
翔子 心配？  
美紗 本当なんやろうかって、  
翔子 それで？  
美紗 だけど、ご飯を口に運んで、食べた。  
翔子 ご飯を？  
美紗 食べた。ご飯を口に運んで、食べた。ごめん。  
翔子 食べるよね、謝ることやないと思うよ。  
美紗 ごめん。  
翔子 遠く離れた場所で日常があって、ご飯食べたらおかしいなんて、それこそおかしいよ。  
美紗 断食するべきやったやろか…。  
翔子 …ご飯食べることが不謹慎ってこと？ そんなの、おかしい。  
美紗 …。  
翔子 なに食べたん。  
美紗 …。  
翔子 不謹慎やないけん。  
美紗 …お寿司。  
翔子 お寿司の何食べたん。  
美紗 …ビントロとか、甘海老とか。

翔子 何皿。

美紗 …二十皿ぐらい。

翔子 ひとりで二十皿？

美紗 …彼氏と。

翔子 高級？

美紗 え？

翔子 回らないお店？

美紗 …回転。

翔子 回るやつやあー。

美紗 …回るやつ。

翔子 楽しく食べれた？

美紗 気もそぞろやったけど、お寿司は楽しく食べれた。

翔子 変わらない日常があるね。お寿司食べとる人は、どうやった？

美紗 どうやったって？

翔子 様子。

美紗 ああ…、予約してスムーズに順番が来る人、長い時間待つとる人、お会計待ちの人。

翔子 お寿司食べとる人は？

美紗 ああ…、沈痛な顔して食べとる人は誰もおらんかった。

翔子 そりゃそうよ。遠く離れた場所での日常やからね。

美紗 お会計を呼ぶ、ピンポンの音。レーンの端から注文したお寿司がすーっと流れて来る音。厨房からは何かの機械音。子供がはしゃぐ声。大人が楽しむ声。店員さんのアナウンス。煌々と光る店内。

翔子 …。

美紗 大雨警報。防災無線からアナウンスが流れてる。雨が強くて、ハウリングして聞こえない。自宅にある小さな機械から、避難するように指示が聞こえる。窓から吹き込む雨が強くてタオルを敷き詰めないといけない。近くのと繋がついてる排水溝からは、高潮で逆流して水位が上がって来ている。玄関が少しずつ浸水している。裏山が沈黙しているのが怖い。お会計を呼ぶ、ピンポンの音。子供がはしゃぐ声。大人が楽しむ声。煌々と光る店内。流れて来る音が聞こえる。店内には土砂が流入して覆いかぶさる、私からは何も見えない。

翔子 …。

美紗 大雨と関係のない遠く離れた場所で楽しくお寿司を食べている、その場所に、土砂が一気に流れ込んで来たらと想像しながら、お寿司を食べていた人間が、私。土砂が流れ込んで覆いかぶさる様子を、店内にいる人に投影してたなんて、お寿司を食べとる自分たちに投影されてたなんて、誰一人知る人はおらんかったと思うよ。

「滲む山」

翔子 …そう。  
美紗 そんな気持ち。  
翔子 うん。

台座越しに翔子と話していた美紗が、台座から離れ、翔子の横に座る。  
蝉が激しく鳴いている。  
本堂の方から彩香と国勝が歩いて来る。

翔子 落ち着いた？  
彩香 うん、ありがとう。  
翔子 良かった。

国勝は美紗と翔子と会話をせず、ゴンズイへ近づく。

美紗 触ったらいけんよ、ゴンズイは死んでも毒持ったままやけん。

国勝が屈み、ゴンズイを見つめている。それを見つめる彩香。  
黙って見つめる、美紗と翔子。

国勝が靴を脱ぎ、片手に持った靴で、猛烈にゴンズイを叩き始める。

美紗 え。

呆気にとられて、突っ立っている美紗。  
ばしん、ばしんと靴が鳴る音。  
誰も動かない。

国勝 これでよし。

国勝がゴンズイを叩く手を止め、彩香と見合わせる。

美紗 叩きまくる、必要ある？  
国勝 叩き、まくらんかったら、良かったん？  
美紗 ここまで叩く必要はないんやない…。  
国勝 彩香を脅したけんな、妊娠してデリケートな時に。  
美紗 脅したのは浩之やで。

国勝 (ゴンズイを指差して) こいつも彩香を。脅したようなもんや。  
美紗 ゴンズイが脅したわけじゃないやんか。浩之が無理やり連れて来て、ひとり

「滲む山」

取り残されとるんやで。

国勝 ひとりって、おかしくない。

美紗 目の前にいるゴンズイは、ひとり。お互い、ひとり。私とゴンズイ、なんやで。

国勝 分かん。

美紗 死を受け入れたゴンズイを叩く必要ある？

彩香 私の為に、怒ってくれとるんよ。

翔子がゴンズイに近づいて、屈んで見ている。

翔子 やっぱり。

国勝 うん。

翔子 そうだよな。

国勝 さすがにね、それはできん。

彩香 命授かったのに、暴力はふるえん。

国勝 気持ちを抑えれんかったけん、こうさせてもらったんよ。

翔子 いいと思う。

三人が輪になり、穏やかに話している。

美紗は輪から離れて、死んだゴンズイと一緒に、その輪を見ている。

翔子 (美紗の様子に気づいて) ああ、伝わってない。

国勝 え。

彩香 え、本当に？

美紗 翔子、「山で死ぬことは避けて欲しい」って言うてたやん。

翔子 (美紗を手招いて) 見て。

美紗 叩かれたゴンズイ見せるなんて、悪趣味やで。

翔子 見て見て、ほら。

翔子は美紗の手を引いて、ゴンズイの前に連れ出す。

美紗 え。

翔子 砂は少しかぶったけど。

美紗 ……叩かれとらん。

彩香 ……赤潮の匂いがする。

翔子 美紗ちゃんと私は、風に乾かしてもらたけん。あ、匂い、大丈夫？

彩香 これぐらい、我慢する。

「滲む山」

翔子 なに言うとするん、我慢する意味ないよ。

国勝 我慢せんでいいよ。

彩香 大丈夫：じゃないかも。

国勝 ああ、ほら。

翔子 少し離れて離れて。気を遣わんでいいけん。

彩香と国勝が、翔子から少し離れる。

翔子 国勝は、つわりないやろ。

国勝 それがな、段々と同じ感じになってくるんよ。

翔子 引っ張られるんやあー、不思議やな。

美紗は会話に入らずに、屈んで、死んだゴンズイを見ている。

美紗 なんで。なんで叩くフリする必要があつたん？

国勝 どっちなんや、叩いて欲しかったんか？

美紗 そんなわけないやろ。

国勝 …誰が、ポリタンクの中身が赤潮って気づく？

彩香 ポリタンク持って、片手にライター、怖くない人なんて、おらんと思わん？

美紗 それは私も怖かった。

国勝 そうやろ？ なんで脅かされないけん？

彩香 あのね、私達。死ぬわけにはいかんのよ。もうすぐ親になるんやから。

美紗 …。

彩香 分かってくれるでしょ？

美紗 それは分かっとる。

翔子 私らも死ぬかと思った。人は信じられないことで、死ぬんやけん。

国勝 本当に傷つけられたら、ただでは済まんかったよな。

彩香 お腹にいる赤ちゃんを脅かした浩之には、怒っとる。

美紗 脅かした浩之、には。

彩香 ゴンズイ使って、自分自身を傷つけようとした浩之に対しては、許しとる。

美紗 使われた、ゴンズイは。

彩香 使われたとしても、浩之の代わりになってもろたんよ。

美紗 代わり？

国勝 自分を傷つけようとした浩之を、ボコボコに殴れるか？

美紗 ゴンズイがひとり、とばっちりやんか。

国勝 いや、とばっちりやない。叩いとらんのやけん。すぐに分からんかった？

彩香 翔子ちゃんは、すぐに分かったみたいやな。

「滲む山」

翔子 親になるふたりが、暴力をふるえるとは思えんもかったもん。  
彩香 こんなことで暴力ふるったら、まるで、お腹の子供にふるってるみたいになるもの。  
国勝 あり得ん、あり得ん。

美紗がゴンズイの横でしゃがみこんでいる。

美紗 なんで、私を騙すようなことしたん。  
国勝 ああ、ごめん。ちよつと、気持ちが入り込んでしもた。だって、自分を傷つけようとした浩之を、ポコポコに殴れるか？ 俺らの子供を脅かした浩之を、許さんといけん。俺らは親になるんやけん。腹立つとるけど、許してやる。ポコポコに殴りたいところやけどな。

彩香 抑えて抑えて。

国勝 あれ。

彩香 和尚さんから聞いたやない、山で死ぬことは避けて欲しいって。

美紗 …山は厳しい。海も厳しい。この山は、おじいちゃんみたいなもの。

彩香 ？

国勝 分かん。

美紗 ゴンズイは浩之に連れて来られた。浩之の脅かす手伝いをしたけど、地面にひとり、取り残された。国勝は叩くフリをしたけど、本当には叩いてない。

国勝 なに？

翔子 国勝、彩香ちゃん。色々な事情があるんよ、みんな。ふたりも、そうやろ？

国勝 ああ…、そうやな。

国勝と彩香はあきらかに戸惑った表情を受かべている。

観音様が不在の台座に、白い布が掛けられているのを見つける国勝。

国勝 白い布。

彩香 ああ…。

翔子 美紗ちゃんかな、棺桶の中のおじいちゃんを思い出すんやって。

彩香 美紗ちゃんのお父さん、やったもんな。

美紗 浩之のおっちゃんと言うたんよ。この、お寺の山自体が栄吉さんみたいなんや。美紗ちゃんを見守ってくれとるでって。

国勝 (戸惑うのを見せないように) ああ、そうかな。そうなん、やな。

彩香 (国勝と同じく戸惑いを見せないように) そうなんやな。

美紗 …。

国勝 …浩之は、何がしたいんやろうか。

「滲む山」

翔子 おっちゃんは、浩之が何をしでかすか分かんと思つとるみたい。でも身内やけんね、弱い人間やから大それたことはできんって、庇つとる。

国勝 おっちゃん、どこまで知つとるん。

美紗 ゴンズイを浩之が連れて来たことは、知つとる。

翔子 なんで落ちとるんかは知らんのよ。

美紗 「ちよつとした遊び」なんやって。

翔子 美紗ちゃん。

国勝 なに、それ。

美紗 おっちゃんが言うとつた。家の前の海で浩之が、柄杓でポリタンクに赤潮入れとつたんやて。声かけたら、「ちよつとした遊びや」言うとつたらしい。

国勝 あいつ…。

彩香 抑えて。和尚さんの話聞いたやろ、国勝。

国勝 山で死ぬことを避けて欲しいなら、山じゃないとこなら、いいんやな。

彩香 それはやめて。

国勝 なんで。

彩香 お腹の子供に暴力ふるうことと同じになつてしまう。

国勝 …ううう。

美紗 彩香と国勝が許せるなら、本人に聞いてみたいと思つとる。脅かした行為を認識しとるのか。

翔子 美紗ちゃん、震えとる。

美紗 え。

翔子 美紗ちゃん、まだ力がぐーっと入つたままなんやね。私らも、死ぬかと思つたけん。

彩香 …もらつた魚を食べんかったことは、悪かつたと思つとる。

国勝 海端出身やけど、食べん事情の人らもおる。無理して食べることはないんやけん。

翔子 噂では聞いたつた。

美紗 噂？

翔子 国勝と彩香は、魚を絶つたつて。

彩香 待ち望んだ子供やけん。今は少しでも不安なことはしたくない。魚が怖い。

美紗 食べるのも、見るのも？

彩香 見るのは大丈夫。

美紗 海も山も怖い？

彩香 え？

美紗 大雨災害の時に、山と喧嘩して何人も亡くなつとる。いつか、海とも喧嘩する。

国勝 怖いことはない。

二、

朝焼けで滲んだ山も空も昼には無くなり、今度は夕焼けで赤い空になろうとしている。

寺から見える小さな湾の後ろに控える山。

木々の重なり具合が大きな隙間を生み、その山から寺が見える。

彩香 私は少し怖いけど。

国勝 不安なんか？

彩香 全てに少しずつ、不安なんかもしれん。

国勝 生きる場所はどこでも、完全な安全はないよ。な、俺が守ってやるけん。

彩香 分かった。

国勝 大きな地震が来たら、この山をめがけて逃げないけん。

彩香 ここは避難場所にもなつとるもんな。

翔子 山には死が集まってくるだけじゃなくて、生も集まってくるな。

国勝 逃げて来る人を、はなから死んだるように言わんでくれ。

翔子 ごめん。

彩香 …もらった魚を食べんかったけん、浩之はこんなことしたんやろか。

国勝 どうやろう。

相変わらず、激しく鳴いている蝉。

四人はゴンズイを囲み、硬い顔をしている。

美紗

(ふと見て) …おっちゃん。

本堂の奥にある、お墓の方から戻って来て、膝をついて座る重正。

四人とも、ゴンズイから離れて重正を立たせに走って行く。

「滲む山」

山の斜面に、美紗、翔子、その横に浩之が座り、寺がある山を見ながら黙っている。

浩之の横には、バケツが置かれている。

翔子 ああ、境内がよく見える。  
美紗 うん。

バケツを気にして、美紗と翔子には緊張感が漂っているが、それを見せないようにしている。

美紗 えつと…。

翔子が「息はできているか？」をジェスチャーで尋ねている。

美紗 …あんまり考えないようにしとる。

翔子 そうだね。

美紗 浩之、朝見た時より日に焼けてない？

翔子 ああ、腕の辺りもよく焼けとるな。

浩之 …。

浩之の反応がないのを確認してから、何気なく会話を進める、ふたり。

美紗 (指を指して) あの、お寺の山自体が、おじいちゃんなんやな。

翔子 (同じように指を指して) この山もやろ。

美紗 そう。

翔子 (身振り手振りしながら) あっちの山は違うんやったつけ？

美紗 それやない、(指を指して) その横の山。

翔子 ああ、あれかあ。

美紗 うん。

翔子 こうやって、お寺の正面の山から見ると、生も死も混ざつとる山やな。

美紗 山には、死が集まって来るって、何度も言つとったな。

翔子 …ああ、お寺とお墓も、よく見える。

美紗 …。

翔子 ね。

美紗 (指を指して) こっちの斜面、お墓が下から上まで広がつとるやろ。夕方、

あの山を見たら、ぼんやりお墓が見えるわけ。でも昔から、怖くなかった。お墓

なのに怖い気持ちはなくて、斜面がうっすらと白く光つとる気がするんよ。

翔子 ありがとう。

美紗 さすが、お寺の娘さん。

翔子 あの斜面のうっすら光つとる部分、お墓は山と共存しとるけんね。

美紗 厳しい山も、お墓に手出しはせん？

翔子 大雨災害の時も、お墓は大丈夫やったんよ。

美紗 朝には赤く滲んどった山が、夕焼けでうっすらと優しい赤に滲もうとしとる。

翔子 (山の下に見える小さな湾に向かって) おばあちゃん！

美紗 はい！

翔子 おばあちゃんがそう言うてくれとるんかな。

美紗 きつと、そう言うとるよ。

翔子 そうやね。

美紗 狭い空。山が重なる急峻な場所。怖さを感じる朝焼け。見下ろした先にある

小さな湾。海の匂いがある。赤潮のような生臭い匂い。山は厳しい。海も厳しい。

今朝、思つとつた。でも浩之のおっちゃんが…、

美紗が浩之に聞こえるように、反応を伺っている。

美紗 このお寺の山自体がおじいちゃんみたいなもんやうて言うてくれた。私を見守ってくれとるって。

翔子は顔を正面に向けたまま、横目で浩之を見ている。

正面の山を見つめたまま、浩之は何も喋らない。

翔子 美紗ちゃんのおじいちゃん、私を呼んでは美紗ちゃんの自慢しとつたんやで。

美紗 ほんど？

翔子 自慢の娘、みたいなものやったんやろうなあ。

美紗 入所しとる時、本当にお世話になったね。ありがとうね。

翔子 仕事関係なしに、楽しくさせてもらうたけん。お世話なつたなんて、いいんですよ。

美紗 自分の泣き声で起きたことある？

翔子 あるなあ。

美紗 わーんって、自分の泣く声で起きるんやから。

翔子 介護施設って、沢山のおじいちゃん、おばあちゃんと時間を過ごすやん。本当のおじいちゃん、おばあちゃんに思えてきて、亡くなると辛いんよ。夢に出てきたりする。夢に出て来てくれた時は、きつと、夢に出て来てくれた相手も、自分に会いたがつて出て来てくれたんだと思うんだよね。泣いてしまう。

浩之が、かすかに顔をふたりに向けながら、黙って話を聞いている。

翔子 浩之も、おばちゃんが夢に出て来てくれた時ある？

浩之 ……

翔子 今朝な、おっちゃん、お墓に愛を囁きに行っとったやろ？ 毎朝おっちゃんがする、おばちゃんへの愛の囁きを浩之は傍で見とるんで。

美紗 へえ、おっちゃんも息子の前で愛を囁くとは根性あるなあ。

浩之 ……

美紗 だいぶ、薄暗くなってきたな。それでも、まだまだ明るいけど。

翔子 夏は遅い時間まで明るいから、私、好きなんよ。

美紗 そうなん？

翔子 今日は月が出るけん、夜も明るいけどな。

美紗 そうやそうや、月や。

浩之 ……

美紗 薄暗くなってきたけど、この山から、あのお寺の境内よく見えるんやな。

翔子 浩之からLINEもらうまで、私ら気づかんかったよね。

美紗 だって、白鷺。ぽつんと白いのが見えて、白鷺やと思ったもん。

翔子 「二百くれた時、美紗ちゃんと境内から手を振ったん分かった？

美紗 白鷺みたいに、じっと立つとるけん、手を振り返してくれたんか分からんかったで。

翔子 あのなあ。おっちゃん、浩之が坂を下るのを走って追いかけてったんやで。

美紗 私らに向かって、膝ついて座ってくれた、申し訳ないって。

浩之は黙っているが、俯いて、軽く頷いている。

美紗 ……

翔子 ……

美紗 今朝まで、海の中におった。変わらない朝が来たと思ったけど、いつもと違った朝が来た。何も言わずに連れて来られて、境内の地面の上にひとり、取り残された。口をパクパクさせてみたけど息もできなくなって、無音になった。さっきまで、蟬が激しく鳴く声が聞こえてたのに。思いがけず死んでしまった。こんなことになるなんて思いもよらんかった。つやつやした肌も、段々と水分が無くなっていく。網ですくわれた時、抵抗する時間もなかった。安穩としてたんじゃない。逃げる前にすくわれてしまった。死が近づいて来とるなんて分からない。地面の上なのに、ゆらゆらして、波で動いている気分になる。鳥が、あの木から見ているのが分かる。体が赤い。海の赤い色が、体にくっついて来ちゃったんだろ

うか。

翔子 ゴンズイって、方言喋るんかな。  
美紗 え。  
翔子 所々、ゴンズイが方言喋ったよ。  
美紗 そんなん、語尾ぐらいやろ？  
翔子 そうそうー。  
美紗 無意識に、語尾だけ方言出たりするよ、誰でも。  
翔子 無意識やな。  
美紗 …脅かした行為は無意識なん？

美紗が浩之に尋ねるが、何かを言いかけて黙っている。

翔子 あれ。浩之も、服濡れとらん？  
美紗 本当や。…海が死んだる匂いがする。  
浩之 …あの後、海に飛び込んだ。  
翔子 …け、携帯は？ LINE できたやん。  
浩之 飛び込む前に、長靴と携帯を横にのけて、飛び込んだ。  
美紗 …ゴンズイは死んだけど、あんた生きとるな。  
浩之 赤潮で魚がおらんかった筏から飛び込んだけど、何がしたかったんか分からん。

浩之が座る横にはバケツがあり、今朝はゴンズイが入っていた。

美紗 そこにも死んだゴンズイが入っとるんやろ。誰かを脅かすのはやめろ。  
翔子 なんにも怒ることはなあーい。通報するほどでもなあーい。  
美紗 おっちゃん、浩之が自殺せんか心配しとったやんか！ 彩香と国勝も、赤ちやんを脅かされたことを、無理矢理許そうとすった！  
翔子 美紗ちゃん。  
美紗 そうやろう？ 何か事情があったとしても、お腹の赤ちゃんまでも脅かすことは許せん。地面に膝ついて帽子取って謝った、おっちゃんのことを思うと涙が出る。

浩之 自分でも何がしたいんか分からなかった。

美紗 はあ？

浩之 考えがまとまらんくって、分からん。

美紗 この山はおじいちゃん、あの山も、そのお寺の山もおじいちゃん。言うときけどな、そこから見える湾は、翔子のおばあちゃんや。山は厳しい、海も厳しい。

浩之 ちょっと待ってくれ。ごめん。今、頭が回らん。

美紗 頭が回らんけん、許してくれ言うのは大間違いやで！

美紗は素早く立つと勢いで浩之のバケツを取り上げ、そのバケツの中身を浩之にかけようとする。一瞬の早さだった。

美紗 あんたは、人が恐怖することがどんなことなのか、分かつたらん。ポリタンク持ったあんたを見て、私らは死ぬかと思つたんやで。彩香も国勝もお腹の赤ちゃんの為に、死ぬわけにはいかんつて、必死やった。おっちゃんは、あんたが自殺するかもしれん恐怖を感じ取つた。誰にでも恐怖はある、それなのに恐怖を押しつけるあんたの行為は最低や。ゴズイも死ぬ恐怖を感じながら、死んだと思う。あんたにも恐怖を味合わせてやる！

美紗はバケツを持った手に力を込め、震えている。  
浩之は少し身構えるも、俯いて受け入れようとしている。

美紗 震えとるん？ 私らには平然と恐怖を突きつけたのに？ これは、あんたがおっちゃんに言うた「ちよつとした遊び」なんかかもしれんな。

翔子 美紗ちゃん。  
美紗 味合わさないと。

翔子 彩香と国勝が言つてたやん、もし浩之に暴力をふるつたら、それは子供に暴力をふるうことと同じになつてしまふつて。

美紗 私には子供がおらんから、大丈夫や！

翔子 この山はおじいちゃんなんやる？ おじいちゃんに暴力ふるうことになつてしまふんやない？ 違う？

美紗がバケツを下げ、浩之への態勢を和らげる。

翔子 美紗ちゃん。理解できんからつて、責め続けるのはやめん？ おっちゃんにお願いされたことは？ 忘れた？

美紗 …忘れてない。

一方的に、浩之を攻め立てた美紗が、静かになる。

翔子 こっちに座つたら。

美紗が大人しくなり、バケツを持ったまま翔子の隣に座ろうとする。

翔子 バケツは置いときさいや。

美紗 いや、浩之が何するか分からんけん、私が持つとく。

美紗がバケツの中を見て、

美紗 バケツの中で死ぬとはな。思いもよらんかったやろうな…。  
翔子 …。

いつの間にか、日が暮れて来ていた。

翔子 (夕焼け小焼けを鼻歌で歌う)

美紗 お寺の娘さんが歌つとる。

翔子 ふふふ(笑う)

美紗 鐘鳴った?

翔子 もう鳴るよ。

真正面のお寺がある山から、鐘が鳴る音が響いて聞こえて来る。

翔子 美紗ちゃん。バケツのゴンズイと、境内のゴンズイ、吊ってあげようか。  
美紗 うん。

薄暗くなつてきて、混乱していた浩之の表情が見えない。

翔子 浩之も、一緒に吊いに行かん?

浩之は頷き、三人は暗くなつてきた山道を歩いて降りて行く。  
東の山からは、少し欠けた月が登ろうとしている。

翔子 ああ、月。  
美紗 綺麗やなあ。

三人は足を止めて、木々の隙間から月を見ている。

三、

山の中腹にある寺。

空には徐々に月が登り、優しく照らしている。

境内の街灯に、ぼんやり浮かび上がる三人の姿。

美紗、翔子、浩之が燃え殻を取り囲んで、立っている。

翔子 ゴンズイを弔った煙が狼煙となって、山や海に喧嘩せんように伝わったらしいのに。

美紗 火、消えてしもうた。

翔子 ゴンズイも灰になって消えてしもたよ。

美紗 新聞に包んだら、あんなに燃えるもの？

翔子 送り火、迎え火の時も、海端で新聞に包んで燃やさんかった？

美紗 あー、燃やしたなあ。ねえ、ここで弔わせてもろて良かったん？

翔子 お父さんの許可は取っとる。

美紗 ……なんか、香ばしい匂いがするな。

翔子 だって、ゴンズイ魚やもん。

風が山の木を揺らす音。

蝉の泣き声は聞こえなくなり、鷺が鳴きながら飛んでいく声が聞こえる。

翔子 (鷺の飛んでいく方向を見ながら) あ、鷺が飛んで行った。

美紗 ……昔、あの小さな湾の向こう側から、お寺の火が朝まで燃えてたのを見とった。

翔子 懐かしいなあ。お盆の送り火やろ。送り火、迎え火を海端でやるもんやけど、昔はお盆に帰ってきた故人を送る為に、お寺でも火を燃やしたんで。

美紗 今年もお寺ではやらの？

翔子 多分やらのじゃないかなあ。

美紗 そっか。

翔子 今日やった弔いの火は、ゴンズイを送れたと思うよ。

浩之 ありがとう…。

翔子 おばちゃんもお墓から、浩之を見とったんじゃないかなあ。

浩之 うん、そうやな。話、聞いてくれて助かった。…ありがとう。

翔子 大したことないよ。あ。

浩之 え。

翔子 この言い方したら、美紗ちゃんが怒るんよ。

美紗 怒らんよ。

翔子 (かすかに笑い) 良かった。二度としたらいいけど、こういうこともある。

浩之 不安や。

翔子 何が。

浩之 自分で何がしたかったんか分からんけん…また、せんやろうか。

翔子 またせんように、コントロールせんと。私らだって、大なり小なりコントロ

ールしとるで。ねえ、美紗ちゃん。

美紗 (コントロールという言葉に反応して) そう…やな。

翔子 あんたも妊娠したら分らない。食べ物や何もかもが、不安でデリケートになることを。魚だって、不安になる人もおると思う。

美紗 翔子、妊娠してみたない言い方。

翔子 結婚したら、すぐに妊娠開始やけん。色々調べとるの。

浩之 ふたりは、俺より何倍も偉いな。

美紗 そんなこと…ない。

翔子 比べてどうするん、あんたも偉いよ。おっちゃんのこれからを、きちんと考えとるんやけん。今回は考え過ぎやったけどなあ。

浩之 …親父の気持ち考えとるつもりやったけど、みんなに迷惑かけてしもうた。

浩之が話すことを、翔子と美紗が見守っている。

美紗 今朝は、空も海も真っ赤で、山も赤く滲んで、引っ張られてしもうた。いつもと違う朝が来たと思つて。浩之は、去年の大雨災害の朝、どうしてたん？

翔子 近所を回つて、お年寄りの避難を手伝つとつたんよ。

浩之 そうやなあ。浩之も、いつもと違う朝が来たんやね。

翔子 裏切られた気がするんよ。

浩之 何が。

浩之 いつもそこにある山が、今まで崩れたこともない山が、なんで崩れないけんのやつて。どつしりとした山が、ぼろぼろと崩れて、土砂が迫つて来たんよ。誰も何も悪いことしとらんのに。昔から同じ暮らしを、細々としてきてるだけやのに。なあんで、避難しづらいお年寄りをわざわざ狙つて、土砂が覆いかぶさるといけんのや。浄水場は壊滅的な打撃、水は出ん。生活用水も飲料水も出ん。家は泥だらけ。俺の家は幸い、床下浸水で済んだけど。猛暑。何年も丹精込めたみかん山が全滅、出荷は見込めん。土砂が流れて、海も汚れて、魚や貝が死んだ。そこまでの被害になるとは、あの朝思わんかった。

翔子の顔色を察して、

浩之 …裏切つた山と同じことをしたわけや、俺は。

翔子 これからは、今まで見た山と少し違う気持ちを起こさせることになったねえ。

浩之 そうよ…。それでも、この町で暮らしていかにいけんけん。

鷺が鳴きながら飛んでいく声が聞こえる。

美紗 山は厳しい、海も厳しい。これからも喧嘩せずにやっていけるん？

浩之 そうやな。喧嘩はするやろうし、突きつけられることもあるやろうけど、この町で暮らすんやけん。受け入れていかんといけん。

翔子 なんか、浩之が言うとは…。

浩之 …微妙やな。今のは山と海に対して純粹に話したんやけど、自分への例え話やったら、支離滅裂や。ブーメランでぶち当たつとる。

翔子と浩之が苦笑いをする。

浩之 美紗ちゃんは。この町をどんな気持ちで見とつたん？

翔子 心配でたまらんかったんよね。

浩之 災害の後、Twitter見とつたんよ。全く住んどうる世界が違うんやけん、災害があつたこの町の人間と他では。色んな場所で災害が起こると、俺も心配しとつたけど、やっぱりこの町が一番心配なんよ。遠く離れた場所にも寄付したり心配したりしとつたけど、やっぱり自分が住んどうる町が大事なんやけん。ランチの写真、誕生日、飲み会、イベント、仕事の愚痴、恋人…。Twitter遡つたら、災害が起きた当日も楽しそうな人いっぱいおつた。

翔子 腹立たんかった？

浩之 腹なんか立たんわい。ああー、これかあつて思っただけ。

翔子 分かる。自粛するのも、おかしくない？

浩之 羨ましかつたな。災害の真っ只中における町の人間と、住む世界がはっきりと区別されたんやけん。

翔子 区別。

浩之 真っ只中と、真っ只中じゃない人間。

翔子 いけん？

浩之 いけんことない。ただ、いいことでもない。

翔子 じゃあ、いけんってこと？

浩之 いけんことはない。真っ只中にいないって、だけ。

翔子 遠い場所で心配する人のことは？

浩之 嬉しいに決まつとる。

翔子 災害の時に、外食をして、ご飯を食べとつた人は？

浩之 ご飯食べたなら不謹慎とか、それはおかしいやろうと思うよ。

翔子 じゃあ、そんな人がご飯を食べながら、心を痛めることは？

浩之 …心を痛めんと、おいしく食べてくれたらいいんやない？

翔子 許す気持ちがあるんやね。

浩之 許すも許さんも、日常がお互いにあるだけやろ。

翔子 大人やな。

浩之 自分の今朝したことを思い浮かべたら、どの口が言うんやって感じやけどな。

翔子 まあ（と笑う）

浩之 真っ只中ではないけん、遠く離れた場所で心を痛めてくれても、真っ只中で

はないんやけんな、あんたらは。そんな気持ちやな。

翔子 私も、そんな気持ち。

美紗が黙って聞いている、何も喋れないでいる。

風が山の木を揺らす音。

翔子 月が。：山が黒く滲んどう。：美紗ちゃん、おじいちゃんの山、滲んどうで。ああ、

街灯にぼんやり浮かび上がる三人は、月を見上げる。

燃え殻を取り囲んで立つ三人の姿が、黒く滲んだ山に染まって、段々と見えなくなる。

月の光で辛うじて、希望を感じるのだ。

完